

リレーエッセイ

朝日新聞連載「これでいいのか学校英語」に思う

中井 弘一

今夏、朝日新聞朝刊に8月4日の「争論」を皮切りに9月3日の「異議あり」にいたるまで、「これでいいのか学校英語」をテーマとしたオピニオン記事が連載された。社内公用語を英語で行うという会社の掲載記事も賑わい、英語教育関係者の注目だけでなく一般読者にも、新学習指導要領の施行を控えてこれからの英語教育のあり方について再考する機会となった。

オピニオンの出発点は「文部科学省が進めているように、英語で教えれば、今度こそ英語が身につくのか」である。

最初に「争論」で、松本茂立教大学教授が「英語で表現してこそ身につく」、それに対して大津由紀雄慶応大学教授が「文法・解釈・作文が能力を築く」との発言で始まる。

以降、「リレーおびにおんーこれでいいのか学校英語」という連載記事が生まれ、①杉山愛(プロテニス選手)「恋愛映画を100回会話学んだ」、②アウターブ・セット(元駐日インド大使、現インターナショナルスクール理事長)「国策として学校の英語教育に重点を置いた」、③直山木綿子(文部科学省教科調査官)「小学校英語、ことば交わす楽しさ知ろう」、④竹岡広信(カリスマ英語教師)「入試改革なくして改革なし」、⑤押切もえ(英語でしゃべらナイトにレギュラー出演モデル)「中高時代の基礎は大きい」、⑥デビット・H・サターホワイト(日米教育委員会事務局長)「英語への熱が冷めている」、⑦三船美佳(バイリンガル子育て中の女優)「ネイティブの先生をもっと雇ったら」、⑧李陽(中国で人気爆発の「クレージー・イングリッシュ教室」を運営)「外国語の習得は頭脳労働でなく、肉体労働。発音まねて朗読・暗唱すること」、⑨中島和子(バイリンガル教育に詳しいトロント大名誉教授)「英語が使える人材を増やしたいのなら、公教育で積極的にイマージョン教育を採り入れるべき」、⑩千田潤一(TOEICの伝道師)「公開テストから推測すると、平均して中学校教員が560点、高校教員が620点前後です」と続いた。

最後に「オピニオン 異議あり」と言う特集記事で、津田幸男筑波大学教授の「幸せの奴隷」になってはいけないと「英語支配の危険性」で連載は締めくくられた。

このトピックに対する発言者の中には学校教育に直接携わらない方もあり、深みのあるご意見でないものもあるが、英語教育関係者でないだけに率直な思いの発言と受け取った。

さて、この「リレーおびにおん」連載記事の中からいくつか考えさせられた観点をいくつか拾ってみたい。まず、杉山愛さんと押切もえさんが共通して述べたことは、「学校でなぜ英語を学ぶのか。どう生かすのか。英語教育では単に習得技術を教えるだけでなく、そういう目的意識を持てる助言も必要ではないでしょうか」「英語は目的ではなく手段。なぜ学ぶのか。ゴールを子どもたちと一緒に考えてあげてください」これは、英語教育の根本に関わることである。英語教育の哲学として、教育者が有しておかねばならない識見であろう。「こうすることができる」「このような考え方が身につく」したがって、将来こういう場面で役に立つとわかりやすく説明できるかどうかである。サターホワイトさんは、「韓国には英語力を高めようというスピリットが国全体に満ちている。日本ではそうしたスピリットが足りない」と発言している。つまり、日本人の学習者には英語学習の目的意識が希薄であると論評しているのである。モチベーションは言語習得の大きな条件である。「英語で行う」という議論には、そのことを十分に踏まえて活力ある指導が求められる。

「瘋狂英語」(クレージー・イングリッシュ)の李陽さんは、「外国語の習得は、自転車に乗ったり、ピアノを弾いたりするのと同じ。頭で考えるのではなく、口から自然と言葉が出てくるまで、繰り返し声に出して覚えるのです。...私が教える場合は、どうやったらネイティブのように発音できるかに重点を置きます。例えば「How are you doing?」。大げさすぎるくらいに1語ずつ正しい発音をやってみせます。口を大きく開き、腹筋を使って声を出します。正しい発音で暗唱できる英文を増やしていくと、自然とごい語彙も増え、文法も頭に入ってきます。やがて自信が付き、ネイティブの前でも堂々と話せるようになる」と発言している。国弘正雄の只管朗読を思い起こさせた。只管朗読とは英文をただひたすら音読すること(500回~1000回)と提唱されていたと思う。Practice makes perfect.という発想である。

これに呼応するかのようには、千田さんは、「何を、どう、どれだけやれば、どこまで伸びるのか。生徒に目安を見せてあげてください。私たちの企業研修では必ず見せます。音読は5回、音読しながら書き写す「音読筆写」は20回、リスニングは約300時間ごとに体に変化が起きる。合計2千時間ほどで劇的な変化が来る。それを最初に見せて、目安と希望を持ってもらいます」と述べている。

いずれにしても、「練習」がキーワードである。英語をスキルの面から捉え、練習こそ全てという感がある。教育における思考力の育成という観点は、考慮されていないように思われる。

また、小学校英語については直山さんが、「いま、私たちの生活は便利になり、話さなくてもコンビニで買い物ができ、自動券売機で切符も買える。これでは言葉によるコミュニケーション

ンの力は弱くなる。人の目をあまり気にせず、間違えることも恥ずかしがらない小学生のうちに、あえて母語ではない外国語に触れ、人と言葉をやり取りする楽しさを味わう。外国語を話す相手に一生懸命耳を傾け、片言でも自分の思いを伝えようと努力する。相手の言うことが分かり、自分の話が通じたとき、子どもの喜びはとても大きい。そんな体験がコミュニケーション能力の素地となります。外国語を知ることで日本語や日本文化の理解も深まる。文法などの知識は、中学校へ進んでから、きちんと学ばねえんです」と言葉を交わすこと始めることの大切さを京都弁で柔らかく述べている。とにかく話せばいいのだろうか。指導者の英語力の課題もある。シラバスもなく、小中高と一貫した視点が確立されていない英語教育で果たしてうまくいくのだろうか。考える力をいかに養うのだろうか。

争論として、やや表面的に流れているのは、新聞記事として限界だと思う。しかし、多くの発言で見られた、目的、目標が明確であることの必要性はとても大切な検討事項である。というのも、「なぜ英語を学ぶの」という根源的な問いが、どのような英語教育を求めていくかを答える方向を示すものになると思われる。globish という新しい英語のタイプや日本語能力の低下、内向き志向の学生の増加等様々な課題や検討事項がある。「英語の授業を英語で行う」を行うには、字面にとらわれるのではなくもう少し踏み込んだ議論が必要であろう。